

共同通信社の アジア発 グローバル随想



台北支局長
早川 真

第1回

現地で聞いた「台湾有事」論

イラスト・題字：長峯亜里

「台湾有事」がニュースのキーワードとなって久しい。台湾でもよく話題になる。しかし身近で切実な問題だけに、日本よりも地に足をつけた受け止め方が多いなと感じる。人によって考えに違いもある。現地で見聞きした「有事」論を紹介したい。

射撃教室は盛況

「はい、銃を取って、狙いを定めて！」

年齢も服装もばらばらな男女約10人が、教官の号令に従って一斉にエアガンを発射した。今年2月、一般市民に銃の使い方を伝授する1日体験教室におじゃました。台北市近郊のビルの一室で民間団体が開いていて、予約がどんどん入っているようだ。

自分の身は自分で守る。使用するのは合法的に購入できるエアガンだ。そこそこの打撃力があるので、



一般市民対象の射撃の一日教室

相手をひるませて逃げる時間を稼ぐには十分だ。より入手しやすい催涙スプレーの効果的な使い方も教えてくれる。

台湾有事への備えをおおっぴらに掲げているわけではない。だが多くの参加者はもちろん有

事を意識している。中国軍の台湾上陸だけではない。サイバー攻撃や中国の工作員の活動で台湾社会が混乱する事態も考えられる。ある参加者は、治安が悪化しても「せめて家族は自分で守りたい」と話した。

もっとも、意識が高い人ばかりではないようだ。職場の同僚同士で参加した男性に「皆さん危機感が強いんですね」と聞くと、こう答えた。

「いやいや、僕たちだけです。他の同僚はほとんど危機感ないですよ」

実は外来語

「台湾有事」に対する人々の感覚はさまざまだ。少し極端な例を挙げる。台湾の離島・馬祖列島だ。インターネットで検索すれば分かるが「え、こんな場所が台湾の一部なの」というくらい中国に近い。中国福建省まで船で30分だという。海岸から中国が見える。

昨年、馬祖を訪れて地元の人と話すと、「台湾」という言葉の意味がかみ合わないことに気付いた。食事が出された野菜が「台湾産」だったので「地元のものですか」と聞くと「いや、台湾から運んでいます」という。

そういえば島に着いたときに「台北に駐在しています」と自己紹介したら「台湾から遠いところをようこそ」と言われた。「台湾」とはあくま